

天下一関白神獅子舞



天下一関白神獅子舞の由来

天下一関白神獅子舞の由来は、地元^{てんかいちかんぱくかみししまい}に伝わる「天下一神獅子由来の巻」によると平安時代の延喜12年（西暦912年）に起こったとされています。

平安時代の初め奥州で悪さをしていた蔵宗^{くらむね}、蔵安^{くらやす}が、数千人の悪者を集め高座山^{たかくら}の麓の西山に立てこもり勢力を奮っていました。蔵宗、蔵安たちは、周囲の村々を襲っては、米はもとより金銀財宝を奪い取り、人々に対しては牛や馬を扱うように鞭をあて苦しめ、人々から恐れられていました。蔵宗、蔵安の行いに対し領主は手のほどこしようになく、たびたび朝廷に兵をだして討ち取っていただけるとお願いをしていました。

延喜12年になって鎮守府將軍藤原利仁公^{ちんじゆふしやうぐんふじわらとしひとこう}が、天皇より蔵宗、蔵安を征伐するやうにとの命令を受け、同じ年の5月6日、この地にやってきました。藤原利仁公は蔵宗、蔵安と連日連夜戦い、ついに蔵宗、蔵安一族を滅ぼしこの地に平和をもたらしました。ところが利仁公は突然病に

天下一関白獅子舞

倒れ、ついに同年10月18日に亡くなられてしまいました。そこで家来の青木角太夫正利と青木左近将監一角は、利仁公の亡がらを葬ろうとしたところ突然雲行きが変わり、まわりは真っ暗闇になってしまい、葬儀が出来なくなってしまいました。二人は、これは悪魔の仕業であろうと思い、悪魔を退散させるために空想上の動物である麒麟の形にかたどった頭を天地人の三つになぞらえて作りました。顔は木火土金水の五行にのっとり、頭には軍鶏の尾羽を数千本の剣になぞらえ、この三つの頭を「御神獅子」と名づけたのです。そしてこれらを頭にいただいて早速舞を舞ったところ、たちまち黒雲は消え去り、まばゆい日の光を見ることができました。

以来、一番獅子を青木角太夫正利に、二番獅子を青木左近将監一角に、利仁公の娘、衣姫を三番の雌獅子にそれぞれなぞらえて獅子舞を行うようにしました。

以上が、関白獅子舞の由来伝説です。これらは話として伝わったもので、実際には何時頃から行なわれるようになったのか正確にはわかりません。東日本各地には関白獅子舞と同じ三匹獅子舞が数多く分布していますが、江戸時代に発展広まったものといわれて



います。関白神獅子舞に関する記録では、正徳5年（1715）に「獅子舞手形の事」と題したものが知られており、これは栃木県に現存する獅子舞の中でも一番古い記録です。歴史のある関白神獅子舞は、県内外の各地から獅子舞の指導を依頼されるようになり、また、関白神獅子舞の名声にあやかろうとして各地に関白流を名乗る獅子舞が増えました。

獅子舞の演目は、^{かみまい}神詣り、^{ひらにわ}平庭、^{まさよせ}蒔寄、^{とうどのまい}唐土舞、^{しばかく}弓くぐり、^{みこのまい}芝隠し、御子舞の七つです。なお、最後に舞う獅子舞は、^{おおえじろうまさゆき}蔵宗、蔵安を鬼に、家来の^{ささやまごろうときかげ}大江治郎正行、笹山五郎時影の二人を狩人に、青木角太夫正利になぞらえた獅子が鬼を退治する様子を舞ったものです。

このように関白神獅子舞には、他の獅子舞には見られない壮大な由来話があり、その由来にまつわる獅子舞の演目もあり独特な獅子舞となっています。また、歴史が古く関白流獅子舞の祖となっているなど栃木県の獅子舞を知る上で貴重なものとなっています。そうしたことから栃木県より無形民俗文化財第二号として指定されたものです。

関白神獅子舞は、現在8月第一土曜日、午前9時から午後5時ころまで、関白山神社の境内で家内安全・厄難消除・交通安全等を祈って奉納されています。





《天下一関白神獅子舞のご案内》

奉納日：8月第一土曜日
(午前9時～午後5時頃まで)

場 所：関白山神社



平成26年度宇都宮市伝統文化映像記録作成事業

企画・製作：宇都宮市教育委員会

協力：天下一関白神獅子舞保存会

助成：文化庁平成26年度文化遺産を活かした地域活性化事業

発行日：平成27年3月31日

著作：宇都宮市教育委員会

連絡先：宇都宮市教育委員会文化課

宇都宮市旭1丁目1番5号

TEL.028-632-2764

FAX.028-632-2765



文化庁